チャイルドラインOSAKA常設20周年記念誌

子どもの声を聴き続けて

もくじ

はじめに

チャイルドラインOSAKA　20年の歩み
　Ⅰ：子どもの声を聴く場を求めて　チャイルドライン立ち上げ前夜

　Ⅱ：チャイルドラインOSAKA立ち上げから現在まで

電話着信件数の推移と考察

子どもの声を聴き続けて～わたしたちの想い～
　・元スタッフ、スタッフから
　・子ども情報研究センター編集発行『はらっぱ』掲載記事より

大阪連絡会から～ともに子どもの声を聴く仲間として

子ども情報研究センター理事より

寄附のお願い

参考資料　　全国のチャイルドライン一覧

あとがき

はじめに

子ども情報研究センターで「チャイルドラインOSAKA」を常設して20年の月日がたちました。

この間、多くの子どもが電話をかけてくれて、いろいろな声を届けてくれました。また、多くのおとなが子どもの声を聴くために「子どもの権利条約」を学び、ボランティアとして電話の前に座りました。

私たちは電話を通じてたくさんの子どもに出会い、自分を見つめ直し、多くの仲間と語り合い、この活動を続けてきました。

20年という節目を迎え、改めてこれまでの活動をふりかえり、子どもの声を聴くことの意味を問い直したいと冊子編集に取り組みました。

この春、成人年齢が18歳に引き下げられましたが、長い間日本では20年を一人の人間がおとなになるのに有する時間と捉えていました。1994年に「子どもの権利条約」が日本で批准されてから27年。社会に浸透する十分な時間が経過したはずなのに、子どもの権利は未だ保障されていると言いがたい現状があります。それどころか少子高齢化の波を受け、小さな声はますます届きにくくなっているように感じます。

コロナ禍で、子どもの自殺が増加しているという報道がありました。その背景には様々な要因があるのかもしれませんが、子どもにとってこの社会が生きづらくなってないか、おとなたちに問われていると受けとめました。子ども個人の問題として切り離さず、子ども側に立った視点で社会を見直す必要があると思います。

子どもは社会を構成する大切なパートナーです。今一度襟を正し、子どもの声に耳を傾けるところから始めたい、これまでチャイルドラインを通じて出会ってきたたくさんの子どもの姿が浮かびました。

大切なあなたの時間を使って電話をかけてきてくれてありがとう。
これからも電話を通じてまるごとの「あなた」を受けとめていきます。

これは、私たちの決意表明です。

2022年5月吉日　　チャイルドラインOSAKA

代表　今橋千晶

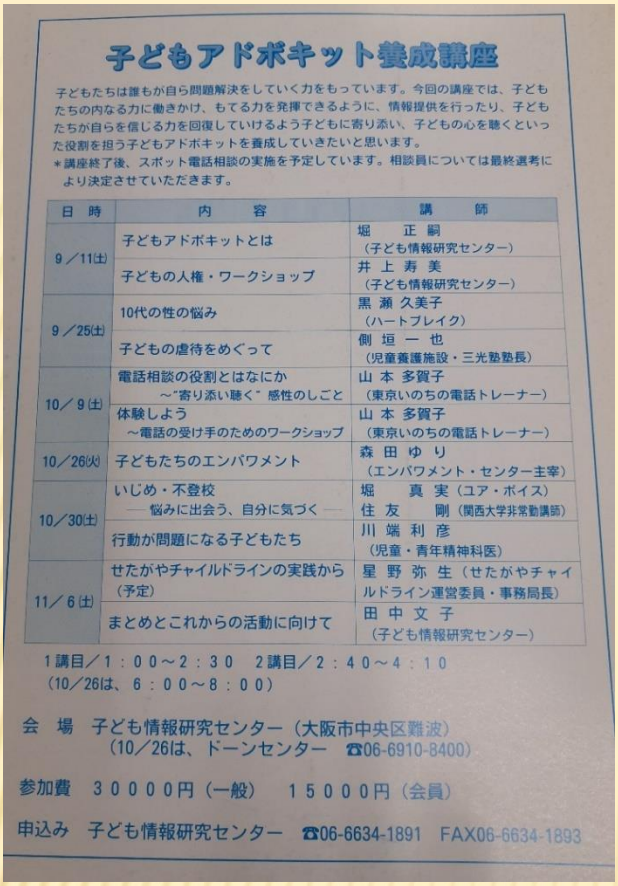
チャイルドラインOSAKA20年の歩み

Ⅰ：子どもの声を聴く場を求めて　チャイルドライン立ち上げ前夜

1994年　*「子どもの権利条約」の国内批准*
　　法人名を「子ども情報研究センター」と変更
1995年　ティーンズのための電話相談「ユアボイス」開局

1999年　『子どもアドボキット養成講座』9/11～1/16
2000年　「10代のためのアクセスライン」
　　第1回スポット電話（1/20～22）午後3時～翌午前3時
　「子どもの日チャイルドライン」参加（5/5～7　48時間実施）
　『子どもアドボキット養成講座』9/9～11/11
　　ステップアップ合宿講座　10/21～22

チャイルドラインとわたし
　今となっては、どういうきっかけだったか忘れてしまったけれど、チャイルドラインの受け手養成講座を知り、受講しました。「チャイルドライン」自体も知らず、子どもが話したいことを話せる電話って？　まずは単純な興味、好奇心から行ってみようと思いました。少年法について少し勉強していて、保護主義の考え方しか知らなかったので、アドボカシーとかエンパワメントというものがとても新鮮で、そして少し戸惑いながら受講したことを覚えています。そして、なにより同期のみなさんとの出会いが私にとってとても大きな、大事な出来事です。
　これまで知らなかったことを知る機会ぐらいに捉えて、受け手として活動することは正直考えていませんでした。そんな私がけっこうマメに受け手として通ったのは、同期の受講生のみんなに魅力があって、チャイルドラインに行けばみんなに会える、話しができると思ってのことでした。まだまだ知られていなかったからか、ひんぱんに電話がかかってくるということもなく、あれやこれやと話をしたり、かかってきた電話のことを話し合い、共有する。その時間、空間は私にとって大きなものでした。
　一度地元に帰りましたが、また戻ってこようと決心したのも、チャイルドラインでの経験があったからだと思っています。今は、法人の事務局としてのかかわりですが、これからどうかかわっていけるのか、自分としても楽しみです。（ｓ・ｍ）



子どもアドボキット養成講座

子どもたちは誰もが自ら問題解決をしていく力をもっています。今回の講座では、子どもたちの内なる力に働きかけ、もてる力を発揮できるように、情報提供を行ったり、子どもたちが自らを信じる力を回復していけるよう子どもに寄り添い、子どもの心を聴くといった役割を担う子どもアドボキットを養成していきたいと思います。

＊講座終了後、スポット電話相談の実施を予定しています。相談員については最終選考により決定させていただきます。

日　時	内　　容	講　　師
9／11(土)	子どもアドボキットとは	堀　正嗣（子ども情報研究センター）
	子どもの人権・ワークショップ	井上寿美（子ども情報研究センター）
9／25(土)	10代の性の悩み	黒瀬久美子（ハートブレイク）
	子どもの虐待をめぐって	側垣一也（児童養護施設・三光塾塾長）
10／9(土)	電話相談の役割とはなにか ～"寄り添い聴く"感性のしごと	山本多賀子（東京いのちの電話トレーナー）
	体験しよう ～電話の受け手のためのワークショップ	山本多賀子（東京いのちの電話トレーナー）
10／26(火)	子どもたちのエンパワメント	森田ゆり（エンパワメント・センター主宰）
10／30(土)	いじめ・不登校 ―悩みに出会う、自分に気づく―	堀　真実（ユア・ボイス） 住友　剛（関西大学非常勤講師）
	行動が問題になる子どもたち	川端利彦（児童・青年精神科医）
11／6(土)	せたがやチャイルドラインの実践から（予定）	星野弥生（せたがやチャイルドライン運営委員・事務局長）
	まとめとこれからの活動に向けて	田中文子（子ども情報研究センター）

1講目／1：00～2：30　2講目／2：40～4：10
（10／26は、6：00～8：00）

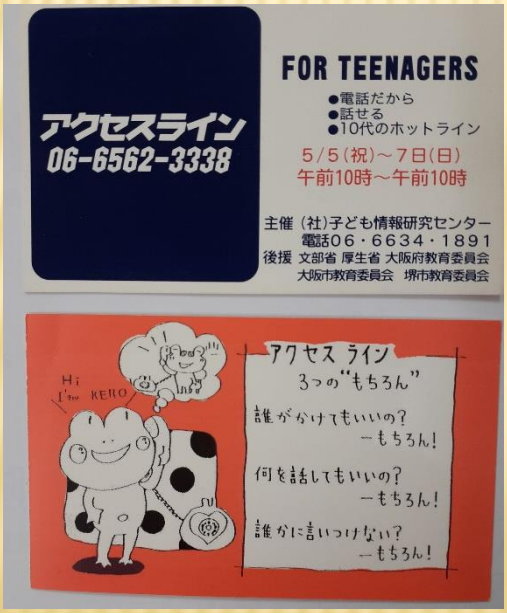
会　場　子ども情報研究センター（大阪市中央区難波）
（10／26は、ドーンセンター　☎06-6910-8400）

参加費　30000円（一般）　15000円（会員）

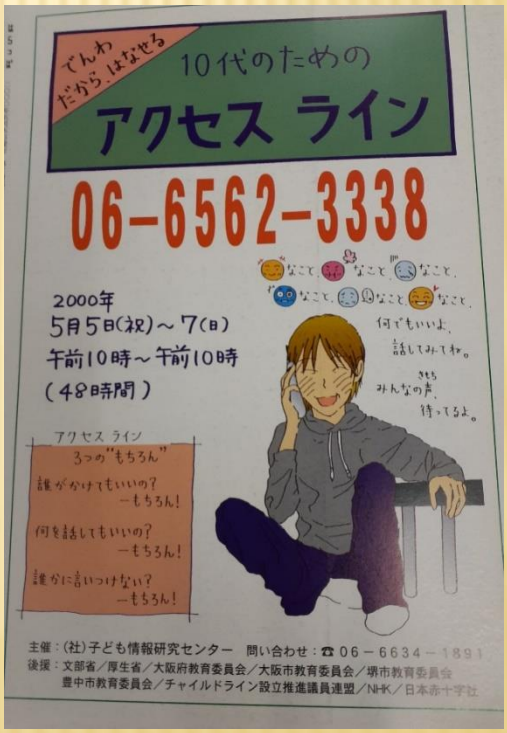
申込み　子ども情報研究センター　☎06-6634-1891　FAX06-6634-1893

第1回子どもアドボキット養成講座
プログラム

第1回スポット電話のお知らせ



アクセスライン広報用カード



子どもの日チャイルドライン
参加の案内

チャイルドラインOSAKA20年の歩み

Ⅱ：チャイルドラインOSAKA立ち上げから現在まで

2001年 「チャイルドラインOSAKA」常設化開始（1/12～）

★「10代のためのアクセスライン」より改称する

「子どもの日チャイルドライン」参加（5/5～6 24時間実施）

2002年 『子どもアドボキット養成講座』 7/27～9/7

2003年 チャイルドラインロンドン・ベルリンツアー（1/4～14）

『チャイルドラインOSAKA受け手養成講座』 8/23～10/25

チャイルドラインOSAKA20周年おめでとうございます。
2001年の手帳、1/12（金）に「チャイルドラインOSAKAスタート3時～9時」とあります。難波駅前、戎橋商店街の入り口すぐにあった木造の旧精華小学校に間借りしていた子情研の事務所兼会議室でのスタート。
事務局として開設準備にかかわるなかで「当事者である子ども自身が問題解決の主体となれるよう支援する」「当事者である子ども自身が、自己肯定感、自己有用感をとりもどせるようエンパワメントを支援する」ことが大切なのだと学びました。
現在は、生活困窮者自立支援法にもとづく支援窓口で仕事をしていますが、子情研で学んだこのことが私の支えになっています。
チャイルドラインの存在意義は高まるばかりですね。これからも息長く。

木村恵子

はらっぱ叢書①
子どもの声を聴く
めっせーじふろむチャイルドラインOSAKA

チャイルドライン
OSAKA
06-6634-7070

FOR CHILDREN
●電話だから
●話せる
●子どもホットライン
毎週金曜日
午後3時～9時

主催 (社)子ども情報研究センター
電話06・6634・1891
後援 大阪府教育委員会/大阪市教育委員会
堺市教育委員会/府内42市町村教育委
員会/チャイルドライン支援センター
NTT西日本大阪支店

チャイルドライン
OSAKA
☎06-6634-7070

●電話だから
●話せる
毎週金曜日
午後3時～9時
(祝日はお休み)

主催 (社)子ども情報研究センター
電話06・6634・1891
後援 大阪府教育委員会/大阪市教育委員会
堺市教育委員会/府内42市町村教育委
員会/チャイルドライン支援センター
NTT西日本 大阪支店

チャイルドライン
OSAKA
☎06-6634-7070

●電話だから
●話せる
毎週金曜日
午後3時～9時
(祝日はお休み)

主催 (社)子ども情報研究センター
電話06・6634・1891
後援 大阪府教育委員会/大阪市教育委員会
堺市教育委員会/府内42市町村教育委
員会/チャイルドライン支援センター
NTT西日本 大阪支店

いつでも、
どんなことでもOKよ。
安心してかけてきてね。

実施期間は、2002/2/24(日)ひる12:00から3/3(日)ひる12:00まで。
☎0725-470-470
チャイルドラインいずみ
～何でも話せる18才までの24時間電話～

困ってる時
むかついてる時
悲しい時
誰かと話がしたい時…。

TEL 06-6634-7070
チャイルドライン
OSAKA
毎週金曜日(祝日は休み)
午後3時～9時
ハイ!
アー!
問い合わせ先 (社)子ども情報研究センター tel. 06-6634-1891

昨日むかついたこと、
今日あったうれしいこと、
明日の楽しみな予定のこと、
最近ずっと悩んでしんどいこと、
身近な人には言えないけど、
電話だからこそ
話せること、ってありませんか?
もちろん秘密は守ります。
あなたがどこの誰かなんて、
聞いたりしません。
どんなことでも、
小さなことでもかまいません。
あなたのキモチ
私たちに聴かせてください。
アー!
競輪補助事業

上：チャイルドラインOSAKA広報用カード
中：チャイルドラインいずみと合同作成カード
下：チャイルドラインOSAKA独自カード

チャイルドラインOSAKA20年の歩み

2004年 『チャイルドラインOSAKA受け手養成講座』 8/7～10/23

2005年 『子どもアドボキット養成講座』 1/28～3/18
　　チャイルドライン夢メッセージ展開始（～2010年）

2008年　合宿研修 2/16～17
　　全国統一番号・フリーダイヤル実施（11月～）
『チャイルドライン受け手ボランティア養成講座』12/13～1/17
　　（チャイルドラインとんだばやしと共催）

全国的なとりくみとして、これまでも期間限定で全国統一番号・フリーダイヤルを実施していましたが、2008年11月から月～土のごご4時～9時で実施となりました。

毎年子どもたちに出会うために様々なイベントを企画したり、他団体と合同の養成講座を企画したりと活動が活発になりました。ボランティアスタッフも多く、チームを作り積極的に取り組んでいました。

子どもに出会うために取り組んだイベント

夢メッセージ展

来場者が作成した絵馬も飾りました

スポーツ、芸能、文化、芸術等各界でご活躍の方が子どもたちへのメッセージを描いた絵馬作品(絵画、文字、貼り絵等）を展示

＜開催場所＞キッズプラザ大阪（2005年/2006年）天保山マーケットプレイス（2007年/2008年）松原市（2007年/2009年）湊町リバープレイス（2007年）大阪市西淀川区、大阪市港区（2009年）マイカル茨木（2010年）

毎年広報用チラシも作りました

来場者の前でオリジナルの紙芝居を披露し、チャイルドラインについて知ってもらいました

チャイルドラインOSAKA20年の歩み

2009年 『チャイルドラインボランティア養成講座』10/31～12/5
（チャイルドラインひがしおおさかと共催）

2010年 『チャイルドラインボランティア養成講座』10/9～11/20

2011年 『子どもの声を聴けるおとな』養成講座　10/15～12/3
（チャイルドラインひがしおおさかと共催）

2012年　『隣る人』映画上映会　10/8　10時～/14時～
『子どもの声を聴けるおとな』養成講座　10/27～12/1
（チャイルドラインひがしおおさかと共催）

2013年
『子どもの声を聴けるおとな』養成講座
11/9～12/14

チャイルドラインの活動はボランティアですが、スタッフの交通費や子どもたちに配布するカード代などいろいろ知恵を使って捻出する方法を考えました。

チャイルドラインのキャラクターを使って缶バッチを作成し、カンパのお礼などに配りました。

スタッフさんの力作！「移動ポケット」です！！いろいろなイベントで資金集めのときに活用させていただきました。

チャイルドラインOSAKA20年の歩み

2014年　チャイルドラインいずみで合同研修　5/25

チャイルドラインすいた、ひがしおおさかと合宿研修　　（7/26・27）

クラウドファンドで支援を募り大阪市内の小中学生やフリー　スクールに172,000枚のカード配布

2015年 『チャイルドライン ボランティア養成講座』 5/9～6/27

【公開講座】ネットにはまる子どもたち～困っているけどやめられない

大阪府立学校人権教育研究会「情報と人権チーム」のみなさん

大阪連絡会として府下の広報用カード未配布地域にカード発送開始

2016年　スポットチャイルドライン(金曜日以外)開始

『ボランティア養成講座』 1/29～2/26

港区区長 田端尚伸さん(当時)と「みなと～く」 9/24

子ども情報研究センター編集・発行している月刊『はらっぱ』で、チャイルドラインOSAKAが特集記事を担当しました。

チャイルドラインOSAKA20年の歩み

2017年　夏休み明け時間延長キャンペー参加（～2019年）

『～子どもの声を聴ける人になろう～
　　チャイルドラインボランティア養成講座～』開催1/29～2/26

【公開講座】若者たちが語る子ども時代

少しでも「子どもの権利」に関心を持てもらおうと公開講座の企画も工夫しました

と～くせっしょん！！と～くせっしょん！！と～くせっしょん！！と～くせっしょん！！

チャイルドライン公開講座

と～くせっしょん！！

「おとなの都合 vs 子どもの事情　どうすればわかりあえる？

～若者の語る子ども時代"あの時、わかりあいたかった・・"」

子どもの意見表明を支えるために、おとなに何ができるでしょうか？
かつて子どもであったわたしたちも、きっと感じていたことがあるはずなのに、おとなになるとどうして「都合」を押し付けてしまうのでしょう？おとなと子どもが対等にわかりあうために、しっかりと子どもと向き合っていくスキルを身に付けたいと思いませんか？
この前まで子どもだった20代の若者たちの話を聴きながら、これからできることを一緒に考えていきませんか？子どもに関わっている方、これから何かをはじめようと思っている方、子ども時代を少し振り返りたいと思う方、たくさんの方の参加をお待ちしています。フレッシュな若者たちがお待ちしております。

この公開講座はチャイルドラインボランティア養成講座（5日間11講座）の初回講座として開催します。連続で受講希望の方は公益社団法人　子ども情報研究センターのHP
http//www.kojoken.jp をご覧ください。

childline チャイルドライン

□日時／2017年1月29日（日）午後2時～4時（受付午後1時半～）
□会場／HRCビル　4階研修室　　（大阪市港区波除4－1－37）
□参加費／おとな　1,000円　（25歳までの方は無料！）
□定員／80名（先着順で受け付けます）＊参加の可否はメールまたはFAXでお知らせします。
□登壇者／20代前半の若者4名
□申込み／裏面の申し込み用紙の内容をお知らせください。

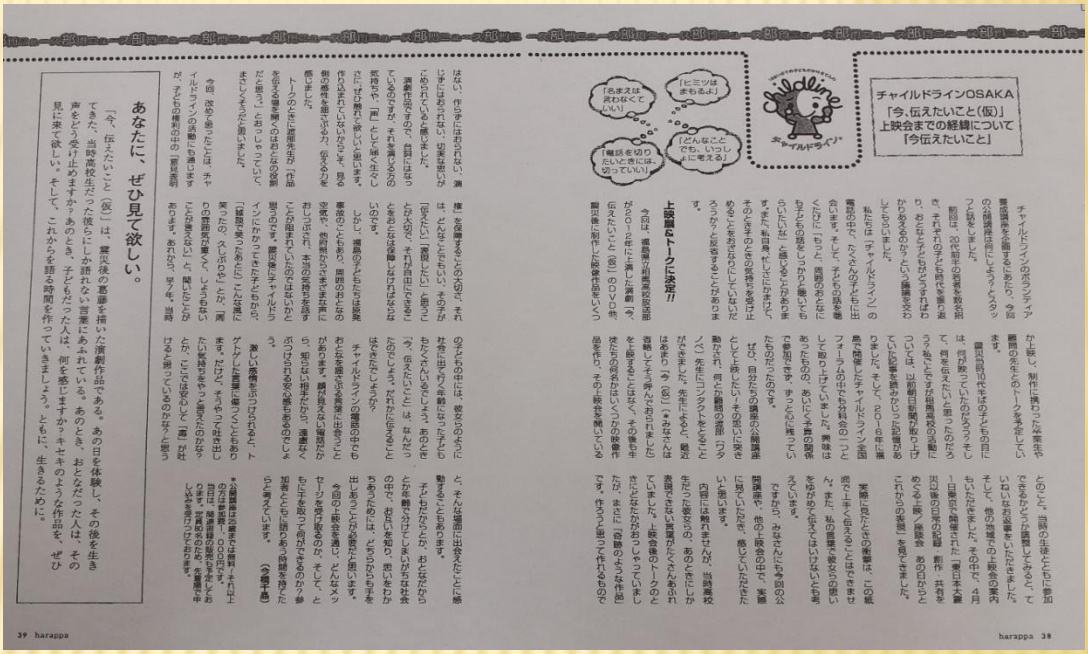
申込み／問い合わせ　公益社団法人子ども情報研究センター
大阪市港区波除4－1－37　HRCビル5階
TEL：06 - 4708 - 7087　　FAX：06 - 4394 - 8501　　メール：info@kojoken.jp

と～くせっしょん！！と～くせっしょん！！と～くせっしょん！！と～くせっしょん！！

チャイルドラインOSAKA20年の歩み

チャイルドラインは「毎日つながる」ようになりました!!

2018年　スポットチャイルドライン開催日を月1回日曜実施に変更
『チャイルドラインボランティア養成講座』 6/30～7/29
【公開講座】のお知らせを部門ニュースに掲載しました↓　↓



チャイルドラインOSAKA
「今、伝えたいこと(仮)」
上映会までの経緯について
『今伝えたいこと』

チャイルドライン

「ヒミツは決まるよ」

「どんなことでも、いっしょに考える」

「悩みを聞いてほしいときには聞いています」

「ちゃまえは言わなくていい」

チャイルドラインのボランティア養成講座を開催するにあたり、今回の公開講座用にしようとスタートとなりました。

開始は、20代前半の若者を数名招き、それぞれの子ども時代を振り返り、おとなとしてもがきながらかかわり、おとなとしてもがきながらかかわりたいと思っている活動を支えてもらいました。

「チャイルドライン」の電話の中で、たくさんの子どもに出会います。そして、子どもの様々な悩みに対して「もっと」、周囲のおとなにもっとこの様をしっかり聞いてもらいたい」と感じることがあります。また、私自身、そしてこれまでのそのときのとその繋がりを改めて止めることをおさえられていないだろうかと反省することがあります。

上映会トークに決定!!

今回は、福島県内県高校部部長の先生に講演「今、伝えたいこと(仮)」のDVD鑑賞後に制作した映像作品をいっしょに見て、制作に携わった学生や顧問の先生のトークを予定しています。

顧問は40代半ばの子どもの目には、何が映っているのかなぁ？そして、何を伝えたいと思ったのかなぁ？と、それぞれの子ども時代を振り返りつつ、私たちが相関高校の活動に対して、どうかかわっていくのか、ということは、以前から相関高校の活動について記事を読みかたいと記憶があります。そして、2016年に福島で開催されたチャイルドライン全国フォーラムのせたが社会のつどいを取り上げていました。興味はあったものの、あいにくそこの関係で参加できず、すっとっと心残っていたものだったのです。

せっかく自分たちの福島の公開講座として開催したい！その思いに突き動かされ、何とか顧問の先生（スタッフ）先生にコンタクトをとることができました。先生にそなると、最近はあまり（今「仮」）そのなんんは資料しそう呼んでおられました）

関係者や、他の上映会の中で、実際に見ていただき、感じていただく機会があります。

内容に触れませんが、当時高校生だった彼女さの、あのときにが表現できない葛藤がとてもあふれていました。上映会後のトークのときになたがが涙ぐっていましたが、まさに「奇跡のような作品」です。作ろうと思って作れるものではない、作りたくはおれない、必要感じがこめられていると感じました。

演劇作品ですので、会話はなっているのですが、それを言いるこの気持ちや、「間」とした場で生まれたに、ぜひ見て欲しいと思います。

トークのときに顧問先生が「作品を伝える勇気のほどとの交換」と思うことおっしゃっていて、まにしてそうだと思いました。

今回、改めて思ったことは、チャイルドラインの活動に参加します、子どもの現実の中で「言葉表現」

あなたに、ぜひ見て欲しい。

「今、伝えたいこと（仮）」は、震災後の意識を描いた演劇作品である。あの日を体験して、その後を生きてきた、当時高校生だった彼らにしか語れない言葉にあふれている。あのとき、おとなだった人は、その見に来て欲しい。そして、これからを語る時間を作っていきましょう。ともに、生きるために。

harappa 38

harappa 39

2019年 『チャイルドラインボランティア養成講座』

2020年　第1回緊急事態発令中（4／7～5／25）活動休止
動画メッセージ「～たいせつなあなたへ～」
作成&配信
『チャイルドラインOSAKA受け手ボランティア養成講座』
オンラインにて実施
「イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン」参加

電話着信件数の推移と考察

・常設開始した2000年は1月から3月までの件数である。
・2008年11月より全国統一フリーダイヤルの試行を始めたが、翌2009年度の2,391件がこの20年の最多であった。全国からかかる電話を全国のチャイルドラインで受けるという体制に舵を切ったことで、今まで以上に多様な子どもの声を聴く機会が増えた。また、当時は2回線で電話をとっており、受け手も前半3名後半3名の6人体制を取ることができた。
・その後、受信環境の変化もあり1回線で受けることになり、受け手の疲弊を軽減するために受信後毎回ふりかえりを丁寧に実施することになったことで、受信数はピーク時から半減した。
・2014年にクラウドファンディング実施、大阪市内の小中学生へ広報カードを配布した効果なのか翌年以降の件数上昇につながった。
・近年は金曜日以外の開設時間の増加に加え、無言電話が増えたことで年間1500件以上の受信がある。

子どもの声を聴き続けて～わたしたちの想い

20周年おめでとうございます。

　チャイルドラインスタッフとして活動していた頃は、一生懸命耳を傾けることに必死でした。活動を離れた今思うことは、子どもの心の叫びを直接聞ける貴重な場であったと同時に、一人のおとなとしてあの時の子どもたちはどう過ごしているのかなぁとふと思います。

　コロナ禍で子どもたちは先の見えない不安や、新しい習慣に戸惑うことが多いと思います。その中で子どもたちの話を聴く場があることがどれだけ大切なことか。

　私自身もチャイルドラインの経験を活かして、また別の形で子どもたちの成長に寄与していきたいと思っています。今後ともチャイルドラインOSAKAさまのますますのご活躍をお祈りしています。

（元スタッフ　S・.Y）

【チャイルドラインOSAKA 20周年を記念して】

　2005年チャイルドライン支援センターの企画、「子どもたちに伝えたい　わたしの思い　**チャイルドライン　夢メッセージ展**」で、各界でご活躍の著名な方たちの絵馬とともに、展示サポートをするためチャイルドラインOSAKAに参加しました。当時は、社会も、チャイルドラインOSAKAものんびり、ゆったりしていたように思います。

　翌年の研修後、受け手・支え手として10年余、東日本大震災、そしてコロナ禍

今、まさに、子どもたちの気持ちを聴く、ことばの奥にある心に耳を傾けることの大切さを思わずにはいられません。

　ボランティア活動を通して、学びと経験、聴く力、優しさや思いやり、私自身も成長させていただきました。本当にありがとうございました。

（元スタッフ　N.・F）

もう何年前になるんでしょうか…
　子どもの声を聴きたいと、ようやくチャイルドラインの養成講座を受講し、OSAKAのメンバーに仲間入りさせてもらって、篤い仲間と出会い、ミーティングでたくさんのことを学び、貴重な時間を共有させていただきました。
　自分の住んでいる町にもチャイルドラインが欲しいと思えたこと、何とかここまでやってこれたのも、私の中に「OSAKA時代」があったからこそ。今は感謝の気持ちでいっぱいです。
　これからも、子どもたちがより良い環境で過ごせるようともに頑張っていきたいです。
祝！20周年。

（元スタッフ　O・.S）

私のチャイルドラインへの想いは
学校では教えてもらったことのない「人権（じんけん）」というものを身体感覚で学んだ場といえると思います。
押し付けでもなく、放ったらかしでもなく、良い加減の距離感を感じられた場です。
子ども情報研究センターとの出逢い（チャイルドライン）は今の私の原点です。
多くのあたたかい出逢いに感謝です。

（元スタッフ　D・H）

チャイルドラインOSAKA20周年おめでとうございます。

　私は、10年ほど前にチャイルドラインOSAKAの受け手や支え手、運営スタッフもさせていただいていました。現在は大阪の小学校で、教員をしています。学校教育の中でも子どもの声を聴きながら学級づくり、学校づくりをしたいと、子どもとともに授業計画を考えたり、学級の机の配置を考えたりと試行錯誤の毎日です。チャイルドラインのカードが学校に届いた時は、懐かしさを感じながら、子どもたちにチャイルドラインについて説明しています。
　チャイルドラインOSAKAの「受け手養成講座」を受けたのが今から14年ほど前になります。その後運営スタッフとしてもかかわることになりました。当時は、チャイルドラインの認知度も今ほどではなく、「大阪府内に住む全ての子どもにチャイルドラインカードを届けよう」と大阪府内のチャイルドラインと協力して活動したことが記憶に残っています。ボランティアのスタッフさんとともに、大阪市と大阪市から北の市町村すべての教育委員会に電話をかけたり直接訪問したりしました。2年くらいかけて大阪府内全ての市町村にカード配布出来た時の達成感でボランティアスタッフさんと喜びあいました。
　他にも著名人に絵馬にメッセージを書いてもらってチャイルドラインの広報をした「夢メッセージ展」など、たくさんの思い出がよみがえります。
　子どもの持っている力を信じて、アドバイスしない、話を最後まで聴ききるチャイルドラインOSAKA。受け手養成講座で、子どもの権利に今まで触れたことがなかった人が、その考え方を知り、悩み苦しみながらも、子どもとの向き合い方が変わっていかれる姿も何度も目にしました。活動が続くことで、子どもの声を聴けるおとなが増え続けることも本当に意味のあることだと思います。チャイルドラインOSAKA20周年本当にすごいことだと思います。チャイルドラインOSAKAの活動がこれからもずっと続いていくことを陰ながら応援しています。

（E・Y）

チャイルドラインに電話をくれた子どものみなさん、かつて子どもだったおとなのみなさん、ありがとう。みなさんがチャイルドラインにつながってくれて、今、私もチャイルドラインで活動ができています。これからも、チャイルドラインに電話してくれる子どものみなさんの話を聴くことができるように、そして、これからも話を聴いてほしい子どもが十分に話をきいてもらえるように、ずっとチャイルドラインが続いていきますように。

（F・Y）

チャイルドラインの活動を通して、子どもたちはおとなや社会から見えないところで様々な悩みや思いを抱えていると気付きました。まだまだ経験浅く緊張しながら電話を取ることが多いですが、少しでも「電話して良かった」と思ってもらえるような聴き手になれるよう頑張っていきたいと思います。

(I・K)

スタッフからのメッセージ

電話越しの子どもたちの今の思いを聴き、共感することで、子どもたちが一歩前へ進むことができたらいいなとの思いで、これからも頑張りたいです。

(M・K)

あなたのココロの小さなヒカリになりたい！

（Y・N）

知人スタッフからの紹介で養成講座を受けました。当時、高齢者にかかわることが多かったので、子どものことにかかわり、自分の中でバランスを取りたいなと思っていました。活動を始め、こんなに率直な子どもの声を聴くことは他になかなかないだろうなと感じています。

子どももおとなも、なぜか忙しく過ごしています。チャイルドラインでつながっている時、子どもは、せかされることなく、否定されることなく話し、私たちはその声をじっくり聴きます。

そんな時間を、これからも大切にします。（S・.K）

スタッフからのメッセージ

小学生から、大好きな友だちに、意地悪なことを言ってしまったと、泣きながらの電話でした。
自分が悪かったと、謝ったけど、許してくれない。家にも行ったけど、もういいよって言ってくれたけど、会ってくれない。と、そんなことだったと思います。
泣きながらも、自分がしたこと、謝ったことを話してくれました。
ただ、うんうん、そうかそうか、と聴いていました。
情景が見えるようで、切なくなってきました。
「あなたはどうしたいの？」と聞いたら、
「わからない」と、、、。
家まで行っても会ってくれないのなら、ほかにも友だちはいるから、ほかの友だちと遊んだらどうかな？そんな提案をわたしが言ったら、
「嫌だ！！！〇〇が好き、一緒に遊びたい」と、泣きながら、でも、はっきりと力強く話してくれました。今も、その声が聴こえてきます。
「じゃあ、どうしたい？どうしよう....」と、受け手のわたしも、どうしたものかと思いながらもう一度たずねたら、
「もう一回、〇〇のお家に行って謝る」と、涙声でしっかり話してくれました。
「そうか。一緒に行ってあげたいけど、わたしは遠いから行けないけど、言いに行けるかな？」と、言ったと思います。
はっきり、「うん、行ってくる」。それから、涙声で「ありがとうございました」で終わりました。
その子の横に、家の人がいらしての電話だった気配を感じました。「近くにいたら一緒に行ってたやろ。わたしも行ってるわ」と、支え手さんと、泣き笑いしました。
まだ、携帯電話が珍しかった頃の、何年も前の電話でした。自分以外の人のことを、あんなに一所懸命に思えることってステキだ、と、今も忘れられない電話です。

（ペンネーム　なごみの子）

チャイルドラインOSAKAが20周年ですか
おめでとうございます。
感慨深いものがあります。

その頃、私は子育ての相談に携わらせてもらっていたと思います。
おとなの話の向こう側にいる子どもたちの声をききたいと思い、
「子どもアドボキット養成講座」に応募しました。
その時は、アドボキットって何？どうして子どもの電話相談に必要なの？と思っていました。
講座を受けて子どもの代弁者たるおとなが必要なのはわかるような気がしましたが、自分がそれになりえるのかは自信がありませんでした。

実際、子どもの中には、話してくれない子もいたので、おとなとは違う姿に戸惑ったことを覚えています。

まわりのおとなが子どもの話を聴けるようになり、チャイルドラインが無くなる方がいいときいたことがあります。
そうなれば良いのかもしれませんが、まだまだの社会のような気がするのは残念です。

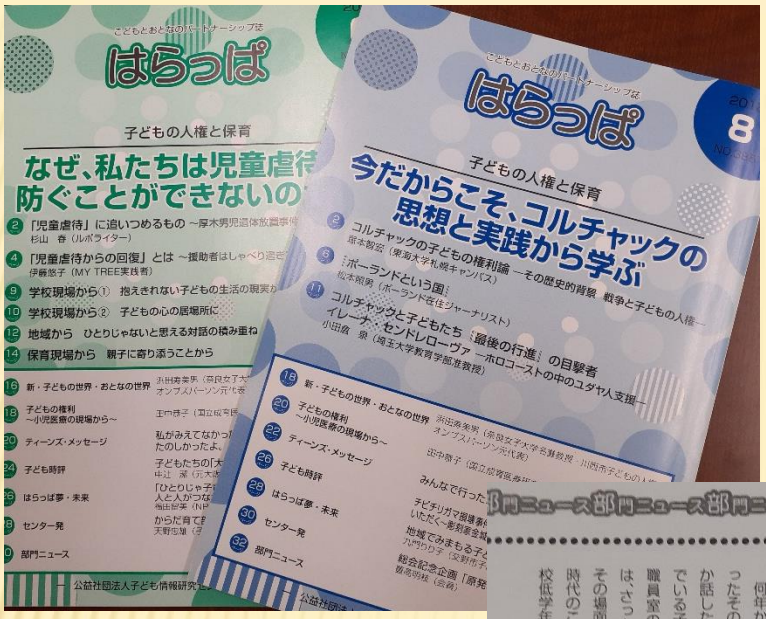
現在、チャイルドラインの受け手としての活動は遠のいてしまっていますが、その精神は、子育て相談や保育にも活かせてもらっています。

今回、その原点を改めて憶いださせてもらってありがとうございました。

（G・Y）

…

スタッフからのメッセージ



隔月『はらっぱ』（2016年4月～2019年2月）では部門ニュースの中で日々の活動の報告やスタッフの思いを記事にまとめました。

部門ニュース

チャイルドラインOSAKA
短いことば
声にならない声も
大切にしたい

何年か前、小学校に行く機会があったその時、職員室の前でただずんでいる子を見かけたことがあった。職員室の扉が中から開くとその子は、さっと廊下の端に行ってしまう。その場面を見ていて、自分の小学生時代のことを急に思い出した。小学校低学年だったと思うが、二つ年の離れた姉が急に熱を出し、母から、姉の担任にそのことを伝えてほしいと頼まれた。使命感？を持ちながら、でも、いざ伝えようと職員室には行ったものの、今の自分なら「姉が急病で欠席します」と簡単に言えるが、当時はどう言えばいいのかわからなかった。扉を開ける勇気も出なくて伝えることができず、とても焦って困っている自分の気持ちを思い出した。

子どものころ、おとなに何かを伝えないといけないときは、大変なエネルギーがいった。どのタイミングで言えばいいのかわからないし、頭の中では、どう伝えたらいいのか、ああでもないこうでもないと、言いたい内容のことばが見つからず、パニック状態。そんなときに、おとなから「早く言いなさい」的なオーラを感じたり「ことばの使い方が間違ってる」と正されたら、もう次のことばが出てこなくなり、頭の中は真っ白になる。ましてや怖いおとなだと、と思いこんでいるときは、目もあわせられなかった。今から思えば、おとなの前で話すことに慣れていなかったし、もともと無口な子だったと思う。でも、こども同士で過ごしていると、ことばはあまり必要がなかったのか、困ったという記憶がない。

チャイルドラインの電話は、おとなの電話と違って、短時間で終わることが多い。「学校にいきたくない」とひとことで、切れる電話。何かわからないことばで怒りをぶっつけてすぐに切れる電話。また、試しにかけてはみたものの、何を話せばいいかわからず、切るタイミングもわからず、戸惑っているような電話もある。かける前に、どれだけの時間と、気持ちをむけたのだろうか？ようやくことばにできたのかな？何があったんだろう？言えて少しはすっきりしたのかな？どんな体験したのかな？、と勝手な想像をめぐらしながら、かけてきてくれたんだなあと思う。そんな短い時間の、子どもたちの気持ちがぎゅっとつまった電話も大切にしたい。そして、自分の子どもも時代の記憶一つ一つも、大切にとっておこうと思っている。

でも、チャイルドラインにかけてきた子どもの気持ちと、自分の経験してきた気持ちは、わけて聴くようにしているが、時々自分の気持ちをかぶせてしまいそうになるときがある。気をつけないと！

※チャイルドラインでは子どもたちにカード配布のためのカンパをつのっています。千円以上カンパいただいた方に、お礼として缶バッチをお送り致します。くわしくはHPにて。

harappa 36

子どもの意見表明を保障するチャイルドライン。
知らず知らずに子どもの権利を奪っているおとなという立場や、力関係を自覚することから活動を始めています。

チャイルドラインOSAKA
子どもからの電話を受けて(1)
—おばちゃん、なんさい?—

「はい、チャイルドラインです。」毎回多くの電話がかかってきます。(チャイルドラインOSAKAでは毎週金曜日、16時から21時まで開設しています。2015年は49日開設し、1028件の電話を受けました。)

すぐに、楽しかったこと・困ったこと・などの話が始まる電話もあります。

けれども、無言が続き、そのまま切れる、(2015年に受けた電話の約30パーセント、307件が無言電話でした)。または、無言の後、「やっぱり、やめとく…」と切れる電話もあります。

かと思えば、「おばちゃん、なんさい?」「どこにいるの?」「子どもいるの?」と、受け手の情報をますます聞きたいという電話もあります。

そんなときには、「どうして知りたいの?」と、知りたがっている気持ちを受けとめます。(チャイルドラインでは、名前・住所などをこちらからたずねることはありません。子どもは匿名で安心して電話をかけることができます。それと同時に受け手もプライベートなことは話しません。個人で電話を受けているのではなく、チャイルドライン全体で対応しているので、「いつでも、だれが出ても、同じように安心して話すことができますよ」という電話です。)

1時間ほど雑談をし、そろそろ話を終えるのかな?と、こちらが思い始めたころから、「あんな、実はな…」としんどかったことを話し出す子どももいます。

子どもたちは、顔が見えない知らない人が相手の電話だから、家族・友だち・先生には言えないことも言える、かもしれません。一方では、知らない人には話せない。どんな人かわからないのに、話すのは不安、ということもあるでしょう。それが、無言、受け手の情報を知りたい、雑談を続ける(もちろん、なんとなく誰かとつながっていたい、という気持ちでの雑談も多いでしょう)などの電話になっているのではと思っています。

子どもたちから電話がかかってくる…子ども専用電話だから当たり前と思われるかもしれません。でも、電話の向こうで揺れ動いている、さまざまな子どもたちがいるということを、感じられる私たちでいたいと思っています。

どんなことでも聴くよ、無言のあなたを受けとめているよ、チャイルドラインがほっと安心できる「場」かどうか、どんどん試してね、という気持ちで私たちスタッフは電話をとっています。

「ヒミツはまもるよ」
「名まえは言わなくていい」
「どんなことでも、いっしょに考える」
「電話を切りたいときには、切っていい」

子どもの　つぶやき

- お母さんは「おとなの事情」と言うけど「子どもの事情」がある
- いっぱいきいてくれて、ありがとう
- つながると思ってなかったからビックリした
- だれにも言えない

チャイルドラインOSAKA
子どもからの電話を受けて(2)
—私の気持ちなんて、わかろうとしなくていいよ—

数年前に、某大学で学生にボランティア活動を紹介する催しがあり、ブースを設けたことがありました。他府県出身の学生さんが「チャイルドラインのカードを持っていましたよ」と声をかけてくれて、うれしかった記憶があります。

チャイルドラインが聴くことに徹して17年、いきいきと暮らせる社会をめざして、子どもたちの声を受けとめています。

「はい、チャイルドラインです」つながっていますが、気配が感じられません…黙って待ちます…そのうち、気配、かすかな音、信号のような音が聞こえてきて、「何、話してもいいの?」と声が聞こえるまでに数分すぎていることもあります。

《知らない人に話すのは勇気がいるよね。話したくなるまで待っているよ》

ワイワイ、ガヤガヤ、クスクス「友だちのことで相談したいんです…」

《あなたの周りにはいっぱい応援団がいるのね。最近カードもらったのかな》

「お母さんが「チャイルドラインにかけてみたら」って言ったので…」

《うん、そうか、そうか。なんでも聴くよ》

「今日は、いっぱい話、聴いてもらって、すっきりしました」

《いっぱい話してくれて、ありがとう》

「私の気持ちなんて、わかろうとしなくていいよ」…長い長い沈黙の後、少しずつ自分のこと話してくれて、解決の方法もわかっているけど、何かから逃れるように、また、泥沼に落ちていくような…その子から発せられた言葉です。私をいたわるような声音に感じられました。

《あなたのことを知りたくて、理解したくて、でも何もできないと、私自身が行き詰まっているのが伝わったんだね、ごめんなさい》

* * *

子どもたちが、どんな人が聴いてくれるのだろうと思いながら電話してくれるのと同じように、私たちも今日はどんな子どもたちに出会えるのかなと、毎回気持ちを新たにして、電話を受けています。

「一をどうしたらいいでしょうか」と始まる電話でも、じっくり話を聴いていっしょに考えていくうちに、解決法は子ども自らが導き出しています。子どもたちの力はすごいです。

でも、途中で切れてしまう電話、おとなの勝手な事情で、子どもがおかれている過酷な状況を、聴くだけで、ただ、聴くだけで、何もできない…そんな電話を受けたとき、心がしおれることがあります。

チャイルドラインでは、毎回、支え手を交えてのふりかえりを大切にしています。苦手な分野の相談にドギマギしたり、子どもが発した言葉にたじろいだり、受け手の反省も含め、心のモヤモヤを支え手にしっかり聴いてもらいます。

そして、新たな気持ちで、また、次の出会いを待ちます。

悩みは尽きないし、話してもすぐに解決しないかもしれません。でも、誰かとつながっていることを大切に、今日も、背筋を伸ばして子どもたちからの電話を受けています。

子どもの　つぶやき

- チャイルドラインってどんな会社ですか?
- ひまだからかけました
- 学校でイヤなことがあったんです
- 今日、ぼく、誕生日

チャイルドラインOSAKA
子どもからの電話を受けて(3)
—「もしもし・・・・・」—

ボランティアをするなら、こどもたちにかかわることをしたいと考えていました。

そんなとき、知人からチャイルドラインボランティア養成講座があることを教えてもらい、講座に参加したのが7年前でした。

初めて電話を取ったとき、「はい、チャイルドラインです」と言ったとたん、緊張から受話器を置いて切ってしまいました。

せっかくかけてくれた子に申し訳ないのと恥ずかしいのとで固まってしまいました。

「次は、大丈夫ですよ」、笑顔で声をかけてくださった支え手の方に勇気をいただきました。

「はい、チャイルドラインです。」

「お歌を歌います!」可愛い声で何曲も歌ってくれました。子どもも私も楽しくて2人で笑っていました。

「明日、学校に行きたくない。」

かすかがずのいじめを話してくれました。寄り添いながらただ聴く、話しているうちにだんだんと声が明るくなり、仲良しの友だちの話になりました。「明日、学校に行きます。ありがとうございました。」

子どもってすごいなあ。話しているうちに自分から元気になっていきました。

「もしもし、・・・・・・・・」長い沈黙とすすり泣きの後、絞り出すような声がしました。ドキドキしながら、受話器を握っていました。自傷行為の相談でした。傷の状態を訊き、安全を確認し、慎重に話を聴かせてもらいました。話が聴くだけで何もできない。話がとぎれ、電話は切れました。

ふりかえりのとき、支え手の方から「あなたは、自傷行為を悪いことだと思っているでしょう」との指摘があり、寄り添うことができず、無意識のうちに善悪の価値観で発言をしていたことに気づかされました。

心の声が聴けていなかったのです。

あれから8年。たくさんの子どもの話を聴かせていただきました。

でも、いたずら電話・セックステレホン・暴力的な電話等、まだまだ聴くことが難しい電話があります。

それでも電話は繋がっています。繋がっていることを大切にしていきたいと思います。電話をかけるのも切るのも子どもたちの権利です。

私は、話が聴けなかったときや迷ったときには基本に戻ります。

実践講座より

チャイルドラインの役割、特徴

①チャイルドラインは子どもの話を何でも「聴く」電話です。

②解決を目的とした相談電話とは違います。

③一期一会の出会いを大切に、相談の継続はしない。

④子どもの人権、エンパワメントの視点を忘れない。

まだまだ未熟な私ですが、これからも子どもたちの声を聴かせていただきたいと思います。

- なんでこの学校に入ったのかなあ
- 頭にくるヤツがいる
- また、電話しますね
- お母さんには幸せになってほしい

チャイルドラインの電話の受け答えに「正解」はありません。1本電話を受けては支え手とふりかえり、受け手の気持ちを落とし込んで次の電話に向かいます。いろんな受け手がいるからこそ、いろんな子どもの話に耳を傾けることができるのだと思います。

チャイルドラインOSAKA「おとなの都合 vs. 子どもの事情」

子どもの意見表明権を支えるために、おとなに何ができるかを考える機会として、ついこの間まで子どもだった若者たちのトークセッション「おとなの都合VS.子どもの事情 どうすればわかりあえる？ 若者の語る子ども時代 あの時、わかりあいたかった…」に参加した。

進行：
河原鳳花さん（社会人1年目23才）

パネラー：
田中怜奈さん（社会人1年目23才）
近藤祐理さん（大学1回生19才）
井出直毅さん（大学1回生20才）

冒頭、進行役の河原さんが「おとなと対立した子ども時代を思い出してお聞かせください。」と切り出したところ、3人とも「おとなと大きく対立したという記憶はない。」とのこと。

肩すかしをくらったようだったが、自分の意見をはっきりと言語化する若者たちに引き込まれていった。

物怖じしない彼ら彼女らの語りに、計り知れない底力を感じたのは、私だけではないだろう。この頼もしき「生」の存在感に触れてみてほしい。

【家族は社会】

小さいころはそれなりに厳しくしつけられたが、中3～高1を境に親子関係が友人に近い関係になった。

家族は社会。どの家事を担うかということについては自分で選ぶようになっていた。自分の頭で考えて何をすべきかを見つけ出す練習を、家族のなかで自然と身につけてきたのだと思う。

基本的に放任だったが、自分の行動に責任をとるということを覚悟させられてきた。

【上からの押しつけには反発】

友人関係について口出しされたことや、宿題はみんなするものとの押しつけに対し、先生に反発した。

自分のなかで考えて納得しないとしたくない。誰もがみな勉強が好きで、勉強が向いているというわけではないので、勉強以外の選択肢をいっぱい与えてもらえていれば良かったと思う。

将来の選択肢を広げるためのツールとしての学力＝勉強をすること、という意味もあったのだと今は思うが、押しつけられてやらされるのは嫌な子どもが多いのではないか。

「将来の選択肢を広げるために、その手段として勉強がある」ということが腑に落ちていたらもっと勉強していたかもしれない。でも、たとえば調理師になりたかったり、部活にいそしんでいたりしたら「勉強が選択肢を広げるツール」だと説得されても納得できないかもしれない。

【子どもを信頼するということについて。子どもとおとなはどうしたらわかりあえるか】

子どもとおとながわかりあうためには、生きている時代差のギャップを埋めるための何かが必要だ。子どもとわかりあうために、たとえば親とは違う若い第三者の力を借りることも有効だと思う。

子どもが親に、ではなく、親から子どものほうへ歩み寄るほうがやり易いのではないか。子どもの関心事に親が関心をもって、たとえば子どもが読んでいる漫画をいっしょに読むとか、子どもが熱中しているゲームをいっしょにやってみるなど、共通の話題ができると子どもの心は開くと思う。

＊　＊　＊

第2部、質疑応答のなかからも、トークセッション参加者にとって、驚きであり気づきにつながる珠玉の発言が次々と飛び出した。おとなの一人として私が受けた衝撃は、おとなの側の度量をこそ問い直させられるものであり、子どもへの畏敬を感じさせられるものであった。

一つには、小・中学生（であったころ）の子どもが、こんなにも哲学的に物事を捉えることができるのだという新鮮な驚き。

Q：宿題をしなかったことで親から叱られたことはなかったか？

☆（子どものとき）おとなが子どもに何らかを課すのには、そこに何か意味があるのではないかと考え始めた。たとえば、クラスのみんなが同じこと（作業、課題）をするということに意味があるのだと理解すれば、自分も宿題をやっていこうと納得できた。

一つには、自らのサポート役としての“資源”を的確に把握できている子どもの力。

Q：親子でのコミュニケーションが困難な状況下にあるとき、どんなサポートがある？

☆「親以外のおとな（友だちの親）」「家以外の居場所」「美味しいごはん」「一緒に遊ぶ友だち」「我が子以外の子どもとも向きあい受け入れていけることができるおとなの存在」

一つには、人間に対する鋭い洞察。

Q：第三者として立つおとなのあり方としては？

☆人間は、後に何が影響が及ぶかも知れないという不安には敏感なので利害関係のある相手には話せないもの。第三者としてのおとなは、このことをわかっていて聞く側に回れるという利点がある。でも、自分に近くないと本気で聞いてあげたいと思わないのも人間。第三者として、聞き役に回ったときに、自分が相手に及ぼす影響の範囲をわきまえることが重要なのでは？

どうであろう。つい先回りをして誘導してしまいそうになるおとな、子どもが自らの力でたどり着くプロセスを奪い取ってしまうおとな、「聴くスキル」を上達させないままでいるおとな、そんなおとなであれば、子どもの前で恥ずかしいと言わざるを得ない。

今回のトークセッションに参加して、子どもの力に驚いているだけではすまされない。子どもの前で人間として甘えていられないと襟を正される気持ちにもなったことは確かである。

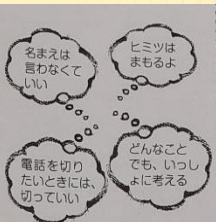
（スタッフ　A）

1月29日(日)の公開講座（トークセッション）に続き、2月5日、12日、19日、26日とチャイルドラインボランティア養成講座を実施し、6名の方が修了されました。3月、4月に実践講座を受講、見学の後、ボランティアスタッフとして活動していただく予定です。

「子どもたちの生の声を聴きたいけれど、『子ども代表』のような立場だと本音が聞けないかもしれないね」・・そんな思いから、子ども時代を過ぎてまだ日の浅い若者たちにいろいろ聞いてみよう！と企画した公開講座でした。いろんなツテ（？）を使って集まってもらった若者たちは、お互い初対面にもかかわらず、自分の言葉で忌憚のない意見を話してくれました。

チャイルドラインOSAKA

伝わる想い



6月30日チャイルドラインボランティア養成講座の公開講座「今、伝えたいこと（仮）」他、震災後制作作品DVD上映会&トーク」が開催されました。2011年3月11日、東日本大震災が日本を襲い、この震災により日本は甚大な被害を受けました。被災された高校生が自分たちの思いを伝えようと作られた演劇をDVDにまとめたものが今回上映された「今伝えたいこと（仮）」です。また、その他4本の作品が上映されました。その後、参加者の質問に答えながらトークがおこなわれました。ゲストとして元放送部顧問の渡部義弘さんと福島県立相馬高校の卒業生の方に来ていただきました。参加者は50人近くに上り、高校生のすがたも多くみられました。

＊　＊　＊

演劇では、届かない当事者の想いが伝えられました。見えない放射線被害の恐怖、流された家、失った家族などの苦しみ、そして自分たちの声が届かない行政、国。「誰か私たちの話を聞いてください」というセリフが心の底から発せられる非常に重い言葉に感じられました。当時の被災地では震災に関することを話すことがタブーであったそうです。中には家や家族、友人を失った人も多くおり、フラッシュバックを起こしてしまうからです。そのような中、話すことがいけないことであるという認識になりました。しかし、自分にしか語れないこと、自分だから話さないといけないことがある、真実を伝えることは必要だ、と思い、記録することが重要だと感じて作られた作品もありました。

映像だからこそ、当時の気もちや感情、雰囲気や風景をそのまま残すことができるということがあると思います。トークに参加された相馬高校の卒業生の方も当時の記憶は徐々に薄れてきているがこの作品を見ることによって当時のことや考えていたことを振り返ることができるとおっしゃっていました。また、映像で見るからこそ伝わってくることもあり、映像と当事者の語りの両方があることよってより心に訴えかけてくるものが感じられると思いました。

国が原発事故の収束宣言をし、震災から何年経っても、被災はそれで終わるのではなく続き続けます。そして、震災が残した爪痕や被災者に残した傷は現在進行形で進んでいる問題となっており、決して忘れてはいけないものです。それらは過去のものではなく、今なお考えないといけないものとなっています。これから未来に進んでいくにあたって大切なのは忘れることなく考え続けることだと語られました。今回の上映で、参加者は改めて震災のことを考えることができ、知らなかった当事者の想いを知ることができました。このような「伝える」活動のおかげで私たちは新たに知り、改めて考え、未来に進むことができるのだと感じました。震災の際に何度も言われた想定外という言葉、二度と起こってはいけない原発事故、それらから学べる教訓を私たちは活かさなければなりません。そして、それを風化させないためにも「伝えていくこと」が非常に重要です。

伝えたいと思った卒業生の方は、どのようなことがあって、どのようなことをし、どうなったかを伝えることによって次につながるのではないかとおっしゃっていました。それは東日本大震災に限らず多くのことに言えると思います。7月の西日本豪雨も大きな被害をもたらしました。以前の経験から被害が抑えられた地域もありましたが、「まさかこまで」といったように想像を超えて大きなダメージを負いました。私たちはこれらの経験を活かすこと、次の世代に伝えていくことが必要になると思います。また、傷を負った方の話に耳を傾けることが大切になります。

私たちは伝えてもらうのではなく、聴こうとする、知ろうとする姿勢を持ち続けることが求められるのではないでしょうか。伝えようと思って聞く人がいなければ成り立ちません。そして、伝えることは大きな力を使います。思い出したくないこともありますし、言いたくないこともあります。どうせ言っても何も変わらない、今さら無駄だという思いもあります。出来事と正面から向き合うことは辛いことです。私たちはそんな思いも含めてその人を受けとめる姿勢をとることによって、その人の気もちに寄り添い、「聴く」ことができるのではないでしょうか。「伝えること」、「聴くこと」は、そこで起こった事実、学べることを未来につなげるということと、その当事者の想いに寄り添うという二つの意味を持つと思います。それは、震災のことだけではなく、様々なことに言えることだと思います。

日常生活で、例えば友人や子どもの話を聞く際にも、その人の話や体験、感情も受けとめる姿勢を持つことによって話してくれたり、聞くことができると思います。また、話してくれることを待ち続けることも重要なことであり、その待ち続ける間の姿勢が重要となってきます。チャイルドラインでは子どもの声を聴く活動をしていますが、そこでは知らない人だからこそ話せることがあると思います。

（企画スタッフ）

●参加者の声より一部紹介いたします。

・映像を作り上映会や講演会を通じて、自分たちの思っていることや感じたこと、考えていることを伝えるのはいろいろと批判もあるだろうし、簡単にできることではないと思いました。しかし、伝えていくことは大切なことだと改めて感じたし、わたしたちも東北の今を知ること、これからもずっと考え続けていくこと、忘れないことが大事だと改めて感じました。（M）

・言いたくても言えないこと、聴いて欲しいと言う気もちがあること、東日本大震災で被災された方のお話やDVDを見て、感じ取りました。でも、その環境の中で自分にしかできないこととして「伝える」ということを大切に努力されている方々の強さを感じました。そのことを知ったわたしたちは、改めて自分ならばどうなのかが考えて、次世代の子どもたちに伝える側として、自分自身も考え続けることを大切にしたいと思いました。（I）

・他者の気もちを受けとめることのむずかしさ、忘れてしまうこと、忘れられてしまうことへの悔しさ…子どもたちが叫びながら伝えようとしたことは、いまだに充分に伝わっていないけど、声を出す側も、声を聞く側もお互いに向きあう姿勢を崩してはいけないと思いました。（R）

/D上映会での様子

harappa

「誰か私たちの話を聴いてください！！」演劇の中で何度も繰り返されるセリフは、スクリーンを通してこちらの胸に迫ってきました。
電話をかけてくる子どもたちも「誰か」を求めているんだな、と改めて考えさせられました。「声」の力を感じる作品でした。たくさんの言葉はいらない。伝えたい思いを受け止めたい誰かがいる。そんなふうに人と出会い、繋がれる社会であってほしいと願います。

チャイルドラインOSAKA
いいたい気もち
いえない気もち
ゆっくり聴くよ

チャイルドラインは18歳以下の子どもの気もちを聴く活動です。

わたしたちはどんな話、気持ちでもまずは受けとめることからはじめます。

そして子どもに寄りそい、話を聴いていくなかで、できることを一緒に考えていきます。

全国共通のポスター・カードなどで、

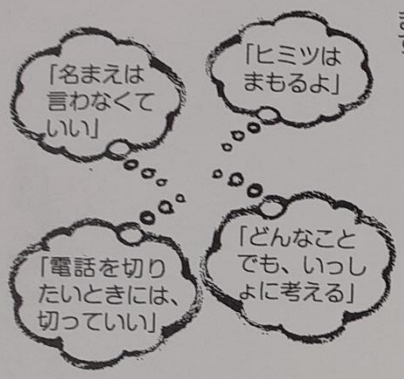
「4つのやくそく
ひみつはまもるよ
名まえは言わなくてもいい
どんなこともいっしょに考える
切りたいときは切っていい」

「知らない人だからこそ
はなせること」

「悩みは
言葉にした瞬間、
小さくなる」

「だれかに
きいてもらう。
きもちがはれる」

などのキャッチコピーを使っています。



チャイルドラインOSAKAでもキャッチコピーを考えようと、自分たちが何を大切に活動しているかを話し合いました。

わたしたちは、子どもの権利条約第12条「子どもの意見表明権」―子どもは、自分に関係のあることについて自由に自分の意見を表す権利をもっていますーが保障される社会をめざしています。意見というと、何か主張することかなと、かまえてしまいますが、思っていること、感じていること、などを受けとめます。

そして、子どもそれぞれの表し方を大切にします。

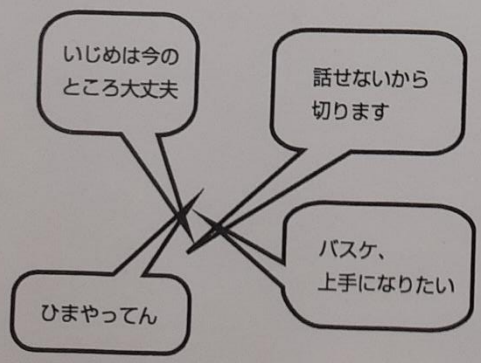
言葉にできない電話、事柄をはっきり判断しにくい電話、こちらを試しているような電話、途中で切れる電話、無言電話など、それも子どもの意見表明として受けとめ、大切にしています。

それらの電話からは、自分の気持ちをどう表したらいいかとまどっている姿が想像できます。言葉として表せなくても、電話をかけてくるという行動を大切に受けとめたいと考えています。

また、子どももおとなも、社会全体が時間に追われ忙しい日々を過ごしているなか、わたしたちは子どものペースで、せかさないで、ゆっくり聴いています。

これらのことを考え、表記のキャッチコピーを考えました。今後の広報などに活用していきます。

子どもの　つぶやき



大阪連絡会より～ともに子どもの声を聴く仲間として

20周年おめでとうございます！
「OSAKA」さんとの出会いは、「すいた」設立の際の養成講座でした。
初めて足を踏み入れるチャイルドラインの世界。難しそうで活動するのは私には無理だろうな、と思ってたのですが、「OSAKA」さんの子どもたちに向けられる眼差しの暖かさにやられました。
これからの節目も一緒に迎えられるように「すいた」もがんばります。

（チャイルドラインすいた）

チャイルドラインOSAKAのみなさま、20周年おめでとうございます。
20年という長い間、共にたくさんのこどもたちの声を聴き、気持ちに寄り添い続けられたことを大変うれしく思っています。
またお会いするたびにこどもを大切に思うひたむきな姿勢に感化され、私も頑張ろうと思えました。感謝の気持ちでいっぱいです。
ありがとうございます。
これからも「チャイルドライン」がこどもの心の居場所であり続けられるように共に活動していきましょう。末永くよろしくお願いします。

（チャイルドラインいずみ）

２０周年おめでとうございます！
チャイルドライン仲間として心強い存在に感謝しています。
これからも子ども主体の子どもの権利が守られる社会を目指し益々のご発展を！

（チャイルドラインとんだばやし）

大阪連絡会より～ともに子どもの声を聴く仲間として

チャイルドラインOSAKAさん
20周年おめでとうございます。先を行くみなさんがいて、続いていく私たちが歩んでいけます。
やればやるほど課題にぶつかる日々ですが、「聴く」ことで救われる子どもたちがいることを信じて、これからも聴き続けていきましょう。

（チャイルドラインはらっぱ）

20周年おめでとうございます！！
私たちは、開設当初のころ、OSAKAさんと養成講座を合同で開催していただき、活動のお手本のように後を追って活動してきて今に至っています。
私たちにとって灯台のような存在です。これからも、ますますのご活躍を願っています。

（チャイルドラインひがしおおさか）

大阪連絡会とは・・？

大阪府内にある6つのチャイルドライン実施団体の総称。
3か月に一度の情報交流の場で意見交換や合同研修などを行う。
毎年、合同で大阪府立高校、私立学校へのポスター配布(約400枚)。
2015年に起きた寝屋川市中1男女殺害事件をきっかけとし、府内の子ども向けカード未配布地域への広報にも取り組む。

理事より～チャイルドラインOSAKA20年に寄せて

「子どもの権利条約」が根づく社会づくりを考える中で、世田谷の取り組みに学ぶことが多く、チャイルドラインにも出会いました。

子ども情報研究センターが発足してまず取り組んだのは「子育ての共同化」ということでした。「子育て」というと何か母親の領分というイメージがありますが、本来子どもを育てる（＝子どもが育つ）という営みは、家庭の中で、さらに家庭と社会とのつながりの中で、子どもとおとながいっしょに生活していくということだったと思います。それが、工業化・都市化の進行に伴って、家庭は社会から切り離され、個別家庭の内に母親と子どもが押し込められていった状況を変えようという取り組みでした。

子どもの生活の中に、家庭の枠を越えていろんな人との出会いの場がいろいろあるといいな。しかも、当てがわれたものではなく、子どもの身近にあり、子ども自身が思い立ったときに、自分が動いて選べる「電話をかける」というツールはとても有意義だと思いました。

ただ、20年経って、子どもにとって「電話をかける」という行為が身近なものなのかどうか、子どもたちの意見をききたいなとも思います。

「子どもの声を聴く」ってどういうことかなあと迷い続けています。「話す人―聴く人」という二分法ではなく、「話す主体―聴く主体」という共同関係を大事にしたい。けれども、「子ども」と「おとな」には力関係の差が厳存することを忘れてはいけない。ごまかし・嘘のない「わたし」でありたい、あなたのことを教えてほしい「わたし」、でも前のめりになることを自戒する「わたし」・・・。

子どもと向き合うと、いつも「わたし」を問い返すことになります。この分断の世の中でつながってくれたことを喜び、子どもとの対話のライン（回線）を地域社会につくっていく工夫を続けたいと思います。

田中文子

寄付のお願い

チャイルドラインＯＳＡＫＡの活動は市民のボランティアによって成り立っています。
そして寄付金が主な財源です。
子どもの声を聴く活動へのご寄付をお願いします。
寄付金は子どもたちへのカード配布、子どもたちの居場所・学校へのポスター配布、
スタッフのスキルアップのための研修費などに使わせていただきます。

3,000円のご支援で

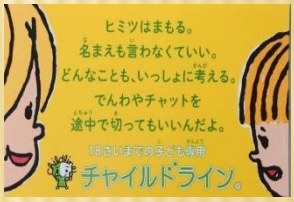
約 3,000 枚のカードを用意できます

6,000円のご支援で

30 枚のポスターを子どもたちの居場所へ送ることができます

200,000円のご支援で

大阪市立学校の小学生・中学生へカードを配布できます



ご寄付いただける方は下記のURLよりお願いします。

https://congrant.com/credit/form?project_id=701

コメント欄にチャイルドラインOSAKAへの寄付とお書きください。

チャイルドラインOSAKAを運営している子ども情報研究センターは寄附金控除の対象となる公益社団法人です。ご寄付に対しては**税法上の優遇措置**が受けられます。

全国のチャイルドライン実施団体一覧

2022年4月1日現在　38都道府県67団体 準備団体1団体　休止団体2団体

エリア	所在地		チャイルドライン名	団体名	連絡先
東北北海道	北海道	札幌市	チャイルドラインほっかいどう	チャイルドラインあきた	011－272-3755
	青森県	青森市	チャイルドラインあおもり	チャイルドラインあおもり	070-1355-2678
		弘前市	チャイルドラインひろさき	チャイルドラインひろさき	090-3129-4581
	岩手県	盛岡市	チャイルドラインいわて	チャイルドラインいわて	090-9748-7557
	宮城県	仙台市	チャイルドラインみやぎ	NPO法人チャイルドラインみやぎ	022-279-7210
	秋田県	秋田市	チャイルドラインあきた	NPO法人あきた子どもネット	090-2995-0313
	福島県	福島市	チャイルドラインふくしま	チャイルドラインふくしま	024-563-4191
		郡山市	チャイルドラインこおりやま	チャイルドラインこおりやま	024-942-4036
北関東	新潟県	新潟市	チャイルドラインにいがた	チャイルドラインにいがた	090-6167-4158
	栃木県	宇都宮市	チャイルドラインとちぎ	NPO法人チャイルドラインとちぎ	028-614-3253
	群馬県	前橋市	チャイルドラインぐんま	チャイルドラインぐんま	027-289-4365
	長野県	長野市	チャイルドラインながの	NPO法人ながのこどもの城	090-9667-0874
		上田市	チャイルドラインうえだ	NPO法人シャイン	090-3565-7086
		諏訪市	チャイルドラインすわ	チャイルドラインすわ	0266-58-3494
		佐久市	チャイルドライン佐久	NPO法人チャイルドライン佐久	070-4189-0155
	埼玉県	朝霞市	さいたまチャイルドライン	NPO法人さいたまチャイルドライン	048-486-7171
	千葉県	千葉市	チャイルドライン千葉	NPO法人子ども劇場千葉県センター	043-301-7262
南関東	山梨県	韮崎市	チャイルドラインやまなし	チャイルドラインやまなし	0551-23-5145
	東京都	港区	みなとチャイルドライン	みなとチャイルドライン	090-7284-0378
		江東区	とうきょうかわのてチャイルドライン	NPO法人こうとう親子センター	03-3632-1717
		品川区	しながわチャイルドライン	NPO法人しながわチャイルドライン	03-5462-2868
		目黒区	めぐろチャイルドライン	NPO法人めぐろチャイルドライン	03-6712-7773
		世田谷区	せたがやチャイルドライン	社会福祉法人世田谷ボランティア協会	03-5712-5101
		中野区	チャイルドライン 中野子ども電話	チャイルドライン 中野子ども電話	080-3919-0489
		杉並区	チャイルドラインすぎなみ	チャイルドラインすぎなみ	090-6012-3903
		八王子市	チャイルドライン八王子 子どもの電話★21	NPO法人子どもネット“八王子”	042-683-0078
		八王子市	八王子チャイルドラインコッコロ	NPO法人八王子チャイルドライン	090-4417－3355
		立川市	チャイルドラインたちかわ	チャイルドラインたちかわ	cl.tachikawa@gmail.com
		武蔵野市	チャイルドラインむさしの	NPO法人チャイルドラインむさしの	080-5679-5100
		狛江市	こまえチャイルドライン	こまえチャイルドライン	03-3489-4583
	神奈川県	横浜市	よこはまチャイルドライン	認定NPO法人よこはまチャイルドライン	045-342-0255
		川崎市	かわさきチャイルドライン	かわさきチャイルドライン	080-6756-7763
東海	岐阜県	岐阜市	チャイルドラインぎふ	NPO法人チャイルドラインぎふ	080-1550-6050
	静岡県	焼津市	しずおかチャイルドライン	NPO法人静岡家庭教育サポート協会	054-631-6762
		浜松市	はままつチャイルドライン	はままつチャイルドライン	ykaoki1gmail.com
	愛知県	名古屋市	チャイルドラインあいち	NPO法人チャイルドラインあいち	052-822-2801
		安城市	チャイルドラインみかわ	NPO法人おやこでのびっこ安城	0566-77-7085
	三重県	津市	チャイルドラインMIE	NPO法人チャイルドラインヘルプラインMIEネットワーク	059-211-0024

現在チャイルドラインを実施している団体は全国67団体準備団体1団体休止団体2団体です。
全国で約2，000人のボランティアが子どもからの声を聴く活動に携わっています。

北陸近畿	富山県	富山市	とやまチャイルドライン	とやまチャイルドライン愛ランド	090-3764-3666
	石川県	金沢市	チャイルドライン・いしかわ	子ども夢フォーラム	076-214-5680
	福井県	福井市	ふくいチャイルドライン	認定NPO法人福井県子どもNPOセンター	0776-97-8460
	滋賀県	大津市	しがチャイルドライン	NPO法人CASN	077-537-5922
	奈良県	奈良市	チャイルドラインなら	NPO法人チャイルドラインなら	0742-20-0202
	京都府	京都市	チャイルドライン京都	NPO法人チャイルドライン京都	075-585-3038
	大阪府	大阪市	チャイルドラインOSAKA	公益社団法人子ども情報研究センター	06-4708-7087
		吹田市	チャイルドラインすいた	こらぼれチップス	06-6382-0290
		富田林市	チャイルドラインとんだばやし	NPO法人チャイルドラインとんだばやし	0721-20-0285
		和泉市	チャイルドラインいずみ	いずみこどもAID	070-8467-2747
		東大阪市	チャイルドラインひがしおおさか	チャイルドラインひがしおおさか	childline.h@gmail.com
		阪南市	チャイルドラインはらっぱ	NPO法人子どもNPOはらっぱ	072-471-2276
中国四国	鳥取県	倉吉市	チャイルドラインうさぎのみみ	チャイルドラインうさぎのみみ	090-6432-2967
	岡山県	岡山市	チャイルドラインおかやま	NPO法人チャイルドラインおかやま	086-956-3700
	広島県	広島市	ひろしまチャイルドライン	NPO法人ひろしまチャイルドライン子どもステーション	082-233-8655
		福山市	チャイルドラインびんご	子どもサポネット「ハートフル」	090-8712-1803
	山口県	宇部市	チャイルドラインやまぐち	NPO法人子ども劇場山口県センター	0836-32-4287
		岩国市	チャイルドライン岩国ステーション	チャイルドライン岩国ステーション	080-1636-1135
		下関市	チャイルドラインしものせき	チャイルドラインしものせき	083-256-6888
	徳島県	徳島市	とくしまチャイルドライン	とくしまチャイルドライン	088-669-2776
	愛媛県	松山市	チャイルドライン　ハートコール・えひめ	子ども電話「ひびき」	089-923-9558
	高知県	高知市	チャイルドラインこうち	チャイルドラインこうち	090-2788-9977
九州	福岡県	北九州市	チャイルドライン北九州	NPO法人チャイルドライン北九州	090-7924-5036
		福岡市	チャイルドライン「もしもしキモチ」	チャイルドライン「もしもしキモチ」	092-734-1540
	長崎県	長崎市	チャイルドラインながさき	NPO法人チャイルドラインながさき	095-801-5521
		佐世保市	チャイルドラインさせぼ	チャイルドラインさせぼ	0956-24-0214
	大分県	大分市	チャイルドラインおおいた	チャイルドラインおおいた	090-3322-3699
	宮崎県	宮崎市	チャイルドラインみやざき	NPO法人チャイルドラインみやざき	0985-41-8228
	鹿児島県	鹿児島市	チャイルドラインかごしま	チャイルドラインかごしま	cl-kagoshima_200926@po3.synapse.ne.jp
準備団体					
	山形県	鶴岡市	チャイルドライン庄内	NPO法人しぇば	
休止団体					
	島根県	松江市	チャイルドラインしまね	チャイルドラインしまね	
	岡山県	笠岡市	チャイルドラインかさおか	チャイルドラインかさおか	

～子どもの生きやすい社会をめざして～
チャイルドライン支援センターでは全国のチャイルドライン実施団体と協働し、子どもの「声」から気づいたことを社会に発信し、子どもの育つ環境が整うことを目指しています。

チャイルドライン支援センター
TEL: 03-5946-8500（平日10時～17時）　FAX: 03-5946-8501
Email: info@childline.or.jp

あとがき

　私たちは子どもからの電話を受けた後、電話の内容・電話を受けて感じていること・考えていることなどを、支え手(安心して電話を受けられるように支え、対応など一緒に考えるスタッフ)に話す「ふりかえり」を丁寧に行っています。
　今回、20周年記念冊子を編集する過程で、活動にとって大切な「ふりかえり」ができました。
　立ち上げ期から初期のエネルギー、かかわってきた多くのスタッフの思い、いろいろな形で支援してくださった方々の存在はこれからの活動の支えとなります。
「子どもの声を聴く」というチャイルドラインの活動は子どもにかかわる活動の基本と自負しています。一緒に活動する、寄付という形で支援する、広報する、などの声をお待ちしています。また、活動中の私たちは気がつかず、周りからは見えることもあると思います。忌憚のないご意見もお寄せください。
　最後に、チャイルドラインに興味を持ち、この冊子を読んでくださったみなさん、ありがとうございます。

スタッフ K

子どもの声を聴き続けて
チャイルドラインOSAKA
常設20周年記念誌

2022年6月発行
発行　公益社団法人子ども情報 研究センター
チャイルドラインOSAKA
TEL　06 - 4708 - 7087(事務所)
http://www.kojoken.jp/